

人生の第一歩

人生の旅路の最初の一歩は自分の足でとるものではない。おんぶされ、抱っこされ、また、最初の乗り物となる乳母車も、自分で操作することができない。しかも、大人達が行く方向を決めてくれる。この点で、

マイ
my way
ウェイ

南山大学学長 ミカエル・カルマノ 2

違ひがないであろう。人生の第一ステージには自由な行動ではなく、産声の後には、しばらくの間は無言の人生

が続くのである。
とはい、記憶がない頃の写真をよく振り返してみれば、そこに自分の将

が続く。学生をマイクロバスに乗せて、クラブやゼミの合宿につれて行ったことのつながりも、この写

ができる。学生をマイクロバスに乗せて、クラブやゼミの合宿につれて行ったところでは、家族のもとに戻ってきた。「國のために」と戦争撮られたのは、ちょうど片

の末期、ドイツ軍は、連合軍の侵攻を妨げる防衛策の一環として、この橋を爆破してしまった。この写真が撮られたのは、ちょうど片方一車線の復旧工事が始まつたところであった。

古い写真に写る将来の兆し

来の兆しを見つけることもできる。日本へ来て大型免許を取つたことの第一歩は、私の生まれた町リンブルクで、町を流れるラーン川を背景に写真を撮られた時

仕事をしており、そのとき母の実家に下宿していた。

私は長男として生まれたのは、(西)ドイツが民主主義国家として生まれ変わった年であった。乳母車の経験は大型車を運転する

幼い頃。後方に復旧工事中のアウトバーンの陸橋が見える。49年

そこで、写真の後ろに微かに見える橋について少し説明を加えた方がいいかもしれません。これは、スピード制限がないことで有名なドイツの高速道路、アウトバーンのために1930年代の後半に建築された橋

の末期、ドイツ軍は、連合軍の侵攻を妨げる防衛策の一環として、この橋を爆破してしまった。この写真が撮られたのは、ちょうど片方一車線の復旧工事が始まつたところであった。

結婚して、翌年に姉が生まれた。その後、兵役でフランスに駐屯していた父は捕虜になつたが、終戦の2年後、家族のもとに戻ってきた。「國のために」と戦争撮られたのは、ちょうど片方一車線の復旧工事が始まつたところであった。

私が長男として生まれたのは、(西)ドイツが民主主義国家として生まれ変わった年であった。乳母車の経験は大型車を運転する

の夢が「日本」という国が登場する物語になるとは誰も予測できなかつた。